

植物ニュース

長野県植物研究会誌は、第9号(1976年)から「植物ニュース」として新産地報告や観察記録など簡単な記事が載るようになった。前段で「ここでは、植物の短い観察記録や分布記録など、断片的なニュースを種ごとにとりあげることにした。手軽にニュースを寄せられるよう期待したい」とある。本号では、1 ハコネシダ、2 エビラシダ、3 オオバノハチジョウシダ、4 ギンバイソウ、5 クロビイタヤの5種を奥原弘人が、6 ツリシュスラン、7 ミタケノイバラの2種を横内斎、8 ハルザキヤマガラシ、9 セイヨウノコギリソウを浅川富雄、10 ケショウヤナギを清水建美が執筆していて、空白を埋めるような形で頁をわけて載せている。第26号まで番号付きで175まで、以後第30号まで番号なしで8種の全183が記録された。第20号にはそれまでの112件の記事の索引もまとめられている。

新産地報告など、1種のみでも普通は短くても1頁くらいにはなるので、まとめるにはそれなりの努力が必要なことから、もっと気軽に会員皆さまから記事を寄せていただけるように、このコーナーをno.184から再開したいと思う。数行でもかまわないので記事を書いてください。とりまとめをするので、大塚あて(kootsu51@yahoo.co.jp)に記事をお寄せください。数量が多いときは、個別の通常の投稿をお願いする場合があります。貴重な情報も書き留めないと残らない。写真や証拠標本を残すことも大切です。この植物ニュースに限らず、個別の新産地報告や観察記録等の投稿も期待したい。

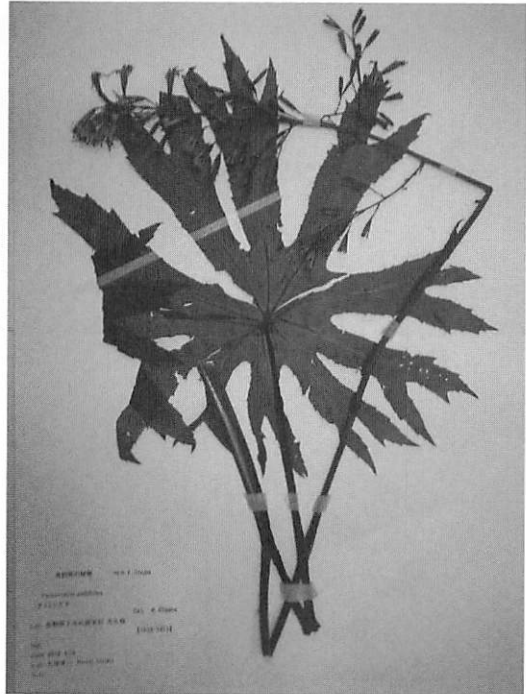
(大塚孝一)

184. タイミンガサ (キク科)

Parasenecio peltifolius (Makino) H.Koyama

長野県植物研究会誌第50号(2017年)に石澤進先生が50周年特別寄稿のなかで、栄村のタイミンガサについて長野県新産を報告された。標本引用がなくその確認ができていなかった。栄村誌にかかわる調査で、栄村大久保(2018.8.28 NAC)及び坪野の2か所で生育を確認した。

(大塚孝一)



184 タイミンガサ

185. ノキシノブ (ウラボシ科)

Lepisorus thunbergianus (Kaulf.) Ching

ノキシノブ(広義)には種内倍数性(2倍体、3倍体、4倍体、5倍体、6倍体等)があることや葉柄の色の違いから緑柄型と黒柄型があることは以前から知られていた。近年、黒柄型がクロノキシノブ *L. nigripes* T.Fujiw. et Seriz. として記載され(Fujiwara et al. 2018)、さらにクロノキシノブはある程度遺伝的に分化した西タイプと東タイプがあるとのこと。県内にはノキシノブとクロノキシノブがある。また、葉がやや幅広いフジノキシノブ *L. kuratae* T.Fujiw. et Seriz. も記載され、本種は天龍村など県南にある。クロノキシノブはノキシノブ2倍体とナガオノキシノブ *L. angustus* Ching との異質4倍体、フジノキシノブはノキシノブ2倍体とツクシノキシノブ *L. tosaensis* (Makino) H.Ito の祖先2倍体との異質4倍体であるという。

(大塚孝一)

186. コゲジゲジシダ (ヒメシダ科)

Thelypteris decursiv-pinnata (van Hall) Ching

ゲジゲジシダ(広義)には2倍体、3倍体、4倍体があることが知られていた。葉の形態から伊藤洋



187 シロバナオトメエンゴサク



189 シロバナコシジタビラコ

(1939) はオオゲジゲジシダ、コゲジゲジシダ、ホウライゲジゲジシダと品種のランクで区別した。芹沢俊介 (2015) はそれらを整理して、前2種を独立種、ホウライゲジゲジシダ (2倍体) を独立種と考えながらもコゲジゲジシダの品種 (f. truncata) においた。さらに、前2種の雑種をアイゲジゲジシダ *T. decursiv-pinnata* × *itoana* (3倍体) として発表した。長野県のゲジゲジシダはコゲジゲジシダ (4倍体) にあたり、今後はコゲジゲジシダとして扱うのが良い。葉柄に鱗片が密につき、葉身が長く、独立裂片が目立つオオゲジゲジシダ *T. itoana* Seriz. (2倍体) にあたるものがあるか精査が必要。

なお、オオゲジゲジシダとコゲジゲジシダの学名は *Phegopteris koreana*, *P. decursivpinnata*, ホウライゲジゲジシダは独立種とされ *P. taiwaniana* とし



188 ヤマナシテンナンショウ



190 チシマオドリコソウ

て発表された (Fujiwara & al. 2021)。

(大塚孝一)

187. シロバナオトメエンゴサク (ケシ科)

Corydalis fukuharae Liden f. *albescens* Yonek. nom. nud.

オトメエンゴサクの白花個体を、栄村誌の調査中の2021年5月4日、同村雪坪 (海拔高度380m) で数個の開花個体の生育を確認した。長野県からは白花個体は今まで報告されてこなかった。本種は「長野県植物誌」ではエゾエンゴサク *C. ambigua* として記録されているが、本州産の種類はオトメエンゴサクとされた。長野県では北部に分布する。

(大塚孝一)

188. ヤマナシテンナンショウ (サトイモ科)

Arisaema nikoense Nakai subsp. *nikoense* var. *kaimontanum* Seriz.

ユモトマムシグサ *A. nikoense* Nakai に似るが仏炎苞を含め全体に小さい。葉は2個で小葉は5枚、互いに接近してつく。開花は5～6月で葉より先に開く。仏炎苞は緑色または紫色で白条が入る。咲き始めはユモトマムシグサ同様花梗柄が長いが成長とともに葉柄が伸び、果実期は葉面と同高か葉面より低くなる。口辺は狭く開出。花序付属体は円柱状またはやや棍棒状。ユモトマムシグサと同地域にあるときはより標高が高い場所に生える。長野県では南部に分布。

芹沢俊介(1986)により、山梨県北岳で採集、ユモトマムシグサの変種として報告された。その後筆者の星山は静岡県内で2カ所、山梨県内の北岳とは別地域の1カ所で確認した。長野県内にもあるという情報を大野順一(浜松市)からいただき、2021年6月伊那市黒河内で確認できた。

(星山耕一)

189. シロバナコシジタビラコ (新称) (ムラサキ科)

Trigonotis brevipes (Maxim.) Maxim. var. *coronata* (Ohwi) Ohwi f. *albiflora* J.Fujita nom. nud.

コシジタビラコの白花品。2018年7月2日、栄村大字堺北野川近くの水路脇において生育を確認した。コシジタビラコは、長野県北部、特に飯山地方において多くの標本記録が存在する。通常のコシジタビラコは花卉が淡青色から淡紫色であるのに対し、花卉が白いものがまれに存在し、シロバナコシジタビラコと命名した。千曲川右岸側の地域ではシロバナコシジタビラコを目撃する機会が多い印象がある。

(藤田淳一)

190. チシマオドリコソウ (シソ科)

Galeopsis bifida Boenn.

標本：NAC198387

辰野町小横川にて、数株のチシマオドリコソウが見られた。本種は長野県北部から東部にかけて稀に見られ、県絶滅危惧Ⅱ類に分類されており、辰野町では初めての記録である。本州から九州の低地に見られるものは外来種と考えられている(米倉, 2017. シソ科, 日本の野生植物)。

(上野勝典・上野由貴枝)

191. キタノミヤマシダ (メシダ科)

Diplazium sibiricum (Turcz. ex Kunze) Sa.Kurata var. *sibiricum*

標本：NAC198606

2021年8月に松本市三城のカラマツ林内にてキタノミヤマシダの群落が見られた。本種はミヤマシダ *Diplazium sibiricum* (Turcz. ex Kunze) Sa.Kurata var. *glabrum* (Tagawa) Sa.Kurata と比べると、葉がやや深く切れ込み全体的に繊細な感じがする。包膜は細列して羽軸や小羽軸に毛がある。全県での記録はあるが、見かけることは稀で美ヶ原周辺での記録はなかった。長野県ではミヤマシダとの中間型で毛が非常に少ないものが比較的多くみられ、以前、原村立場川や塩尻市権兵衛峠で観察した。これらはキタノミヤマシダとミヤマシダの雑種3倍体であろう。

(上野勝典・上野由貴枝)

192. オクヤマシダ (オシダ科)

Dryopteris amurensis (Milde) H.Christ

本種はシラネウラボ *Dryopteris expansa* に似るが小型で、葉身は最下羽片が大きく5角形状。小羽片裏面には小さな袋状鱗片がまばらにつき、葉柄基部の鱗片は淡褐色。「長野県植物目録」(2017)には、信濃町黒姫佐渡山と川上村毛木平が記録されているのみで、ごく稀な種類である。木島平村カヤノ平(2019.7)と栄村秋山郷渋沢(2020.6, 写真)で生育を確認した。

(大塚孝一)



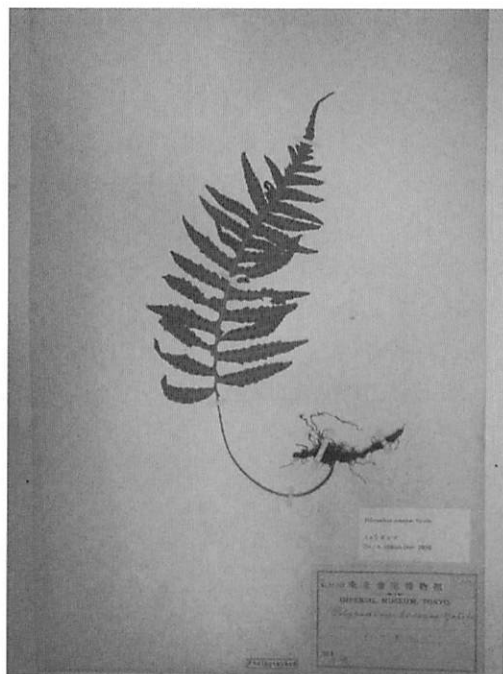
192 オクヤマシダ 栄村渋沢

193. ミヨウギシダ (ウラボシ科)

Polypodium someyae Yatabe*Goniophlebium someyae* (Yatabe) Ebihara

本種は群馬県妙義山で発見され、矢田部良吉により 1891 年に発表された。日本固有種で、本州の関東及び中部地方、徳島県、高知県に産する。長野県では横内 (1983) の記録があるものの、標本証拠等が未確認のため「長野県植物誌」には記録されていない。古い標本が国立科学博物館 (TNS) に 2 枚所蔵されていた (ラベル: 東京帝室博物館 no.32973 及び東京科学博物館 no.1983)。採集者、採集年月日不詳で、「信濃」とだけラベルに記されている。妙義山に近い荒船山塊を詳細に探索すれば、生育が確認できるかもしれない。確認できたら、長野県のフロラに加えたい。

(大塚孝一)



193 ミヨウギシダ

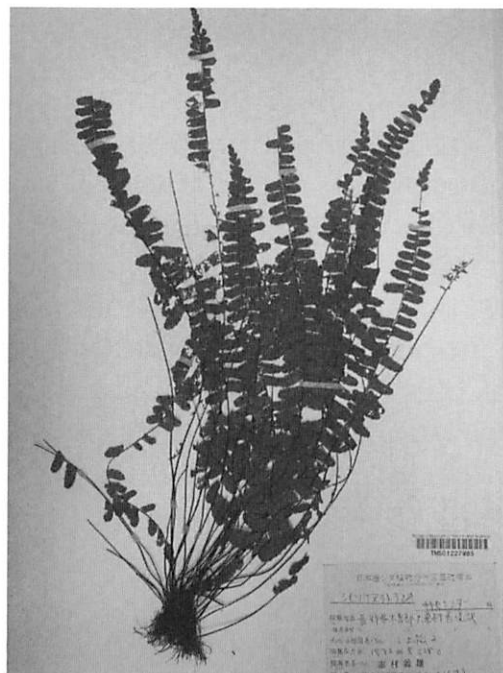
194. シモツケヌリトラノオ (チャセンシダ科)

Asplenium boreale (Ohwi ex Sa.Kurata)

Nakaike

本種はヌリトラノオ *A. noemale* D.Don の変種 var. *boreale* として記載されたが、独立種とされた。「長野県植物目録」(2017)では、佐久市岩宿産が知られるのみであったが、国立科学博物館 (TNS) に木曾郡大桑村長通沢で採集された標本が収蔵されていた (志村義雄採集, 1972-8-28, TNS-1227985)。「日本産シダ植物標準図鑑 I」(2016)の本種の頁の分布図には、この標本に基づいたと考えられる点がある。

(大塚孝一)



194 シモツケヌリトラノオ